

『ファウスト』という作品——「恩寵的試練」の場

下 程 息

キーワード…ゲーテ、『ファウスト』、恩寵的試練、森鷗外、廣池千九郎

愛と抒情の詩人として、とりわけ歌曲『ローレライ』の作詞者としてわが国でも馴染み深い、ドイツの詩人ハインリヒ・ハイネは同時にまた革命家でもあった。だからハイネは、先人ゲーテの時代を「芸術の時代」と呼び、ゲーテの芸術をこう論評している。

ゲーテの作品はわが祖国ドイツを飾っている、美しい彫像が庭園を飾っているように。……ひとはそれに惚れこむことはできる。けれども、それは何も生みはしない。……行動は言葉の産児ではあるが、ゲーテの美しい言葉は石女である。

ハイネは、「政治と革命」という新時代の旗手としてゲーテのアクチュアリティをこう否認しなければならなかった。ゲーテはフランス革命に基因するヨーロッパの政治的混迷状態を嫌悪し、国内の革命運動に対しては冷淡な態度に終始していた。だからハイネはゲーテに向かって批判の矢を突き刺さなければならなかった。けれども、ゲーテの詩は他の追隨を許さないことを内心では認めていた。ハイネを生涯悩ましたのはこういうディレンマであった。

ゲーテの数限りない詩のなかには神々しいものもあれば、楽しいものもあり、官能的なものもあり、民謡調のものもあり、ときに痛烈きわまりないものもある。その多彩さと格調の高さという点では空前絶後である。今はこう申すけれども、白状すれば、学生時代ゲーテの授業をいろいろ受けたが、語学力の不足と勉強のせいで生半可な理解に止まっていた。当時は学生運動の時代だったせいでもあろう、ゲーテには、ハイネがいうように、青年を感激させるところがなかった。『ファウスト』の第二部の授業もあつたけれども、全体は茫漠として掴みどころがないという印象であつた。この読後感は六十歳半ばまで余韻していた。けれども、トーマス・マン、ヘッセ、カロツサ等、二十世紀前半のドイツの代表的作家がゲーテを自己の人生と芸術の導きの星と仰いでいたことを思いだし、ダンテの『神曲』と並ぶ世界文学の最高作『ファウスト』を定年までに残されている年月をフルに活用して講読しようと思つた。

ちなみにストリンドベリーは『ファウスト』ならではの素晴らしさをこう比喩的に言い表していた。森の木はまっすぐではないものも多い。折れている枝もある。梢は風に吹き飛ばされている。だからこそ森の眺めはいっそう美しく雄大なものとなる、と。ストリンドベリーの讃辞はとりわけその第二部について言えるのではなからうか。また、ジツドはゲーテ文学のエッセンスをこう指摘していた。『マクベス』や『オセロ』

を読むとき、シェークスピアを忘れることができるが、ゲーテの作品は何処を読んでも、ゲーテその人を忘れることができない。自分が賛美するのは花だけではない。花を育む植物全体であって、この植物全体から花だけを切り離すことはできない。ジツドの言うように、ゲーテ文学はその人生と切り離しては考えられない。ニーチェによれば、「ルソー的人間」と「ゲーテ的人間」がある。前者は、失われた「自然」を回復するために革命の新声をあげるラディカリストである。ハイネもこの例に洩れない。後者は、地上における偉大なものと深いものをすべて取り入れ、それを人生の糧として成長し努力し続ける人間である。だからこそゲーテは、当時としては驚くほど長生きをして畢生の作『ファウスト』を完成することができた。ゲーテは「己れ自身の裸に己の変化の律動」(ヴァレリ)を聴きだし、それを詩語化することによって人生を完成し、自己の人生を全うすることによってその芸術を完成することができた。『ファウスト』ほど詩作と人生の見事な統一例はない。

ファウストという主人公は円満具足な人間でもなければ、完全無欠な人間でもない。その知識欲と行動欲は人間の限界や分際をはるかに超えている。「世界をその底で束ねているもの」を捉え、「天のいちばん美しい星を取り」、「大地のいちばん深いものを極める」ためには、悪魔との結託をも辞さなかった。テモーンニッシュな情熱に取り憑かれ、それこそ「不可能を欲する」人間であった。だから、迷いや挫折をつねに体験してこなければならなかった。さらには、自分の人生行路において他者の生を犠牲にし破壊してしまう。市井の娘グレートヒェンに恋した結果、彼女を嬰児殺し・死刑という悲劇のどん底へ突き落としたり、また新国土建設という大事業のために、つましく善良な老夫婦フィレモンとパウキスの小屋は燃やされてしまった。理想を追い求める活動のために、彼に供された犠牲の羊は多い。これほどまでに自己本位な人間はいな

いだろう。「善意の人」として「絶えざる努力」をしてきはしたけれども、こういう人間が救われてよいのだろうか。けれども、グレートヒェンの魂が受肉化していた「永遠に女性的なるもの」の導きによって、ファウストの魂は死後救済され昇天していく。これでほんとうによいのだろうか？ 事実、内村鑑三はこの作品をキリスト教の立場から否定していた。「悲劇『ファウスト』」は、よく見るならば、矛盾だらけの「茶番劇」となっていることが判明してくるのであるが、それはじつは文学作品の死活問題にほかならない。トーマス・マンは言う。「茶番劇は悲劇を秘めており、悲劇は——究極的には——崇高な茶化しとなる」。こういう意味で『ファウスト』は真正正銘の悲劇作品となっており、ファウストは最後のところでは救われたという大乘的見地に立つならば、あまりにも問題の多いファウストの人生遍歴は、廣池千九郎のテルミノロギーを転用するならば、「恩寵的試練」の場となっていたと言えよう。こう見るならば、目にみえないところで人間を根底で支えてくれている、「超越的なるもの」への広い意味での「信仰」が示唆されてきはしないだろうか？ 言い換えるならば、思想、宗派、イデオロギーを超えた、人間性の本質的なところで響き合う共同音が聴き取れてきはしないだろうか？

これは、翻訳という原作の死活問題に関連してくる。当然のことながら、授業に臨んでこの作品の森鷗外訳を中心にしてその他のすぐれた訳に目を通した。鷗外訳には古くなつた語法や言語表現が目につく。誤訳も散見される。だから、以後の訳ではこれらの問題は訂正されている。注釈書を参考にしているので、訳文はより正確になってはいる。けれども鷗外は、登場人物個々の性格、個々の場面、劇の展開に密着していかにも舞台の台詞らしく訳している。だからこそ全体はドラマとして生きている。肅然たる格調の高さは他に類例を見ない。訳者鷗外は作品の律動と共鳴しきっている。作品に対する血の愛情が行間に遍満している。

鷗外の文学者としての眼光の閃きに圧倒されてしまう。読む毎に頭が下がる。この訳業は鷗外自身の文学創造と同質同根のものであったと思う。その一範例として最終幕の天使たちの以下の有名な台詞を挙げたい。これは作品全体の究極のキーワードとなっているがために、他の台詞と区別して字間が下記のように一字空けられている。したがって、和訳はそれぞれこの台詞には括弧が付されている。

Wer immer strebend sich bemüht,
den können wir erlösen.

鷗外以降の訳文を例示するならば、

絶えず務め励むものを
われらが救うことができる。(相良守峯訳)

たえず努力していそしむものは、
わたしたちが救うことができます。(大山定一訳)

鷗外訳はこうである。

誰でも、断えず努力しているものは、われ等が救うことができる。

これらの訳の間には一見すればそれほど差異はない。しかしながら、作品全体のコンテクストを踏まえてみると、その差異は大きいと思う。鷗外はここで作品そのものに没入し、それが提起している究極問題を的確に解説していたからこそ、「誰でも」という言葉を挿入したのではなからうか。こうすることによって、「悲劇」すなわち「崇高な茶化し」である『ファウスト』という作品はドラマ自体として生きてくるし、その最終キーワードが読者に明示されてくるのではなからうか。ちなみに手塚富雄はこの個所をゴシック体にしてこう訳している。

どんな人にせよ、断えず努力して励むものを、
わたしたちは救うことができます。

それは、鷗外訳がここで意としていたことを咀嚼した結果、このようにしたのではないかと想定したい。鷗外がファウストという生身の人間を如何に的確に把握していたか、その文学者としての眼力に感嘆するのほかはない。大正二年という年にこの訳業が上梓されたことを思いだすと、それは奇跡のような名訳といふのほかはない。それは廣池千九郎が天理中学校の校長に就任した年であった。その前年、廣池千九郎は東京帝国大学に学位論文を提出したのであるが、教授会の論文審査は満場一致で可決され、吉田茂の義父だ

った文部大臣牧野伸顕によって法学博士の学位が授与された。ちなみにこの学位授与にかんしては、鷗外の訳業と同様、特例中の特例であって、それこそ奇跡とも言えようか。というのも当時は国家が学位を与えており、各大学から学位が授与されるようになったのは大正九年以降のことだったからである。

この授業のためにこのテキストを繰り返し読まなければならなかったことは、言うまでもないが、その都度初めて作品を読んだような新鮮な感銘を受けたのは、奇跡のような読書体験であった。ゲーテ文学とはこういうものではなからうか。そういうわけでその授業の下調べのためにこれほど時間を費やしたことは今までなかった。必要最小限の注釈書や関連文献に目を通さなければ、授業は成り立たない。次に悩まされたのは、授業でどう説明すれば、学生諸君は分かってくれるだろうか、という難問であった。それは小生のそれこそ「恩寵的試練」となっていた。そのために、参加者個人のそれぞれの資性と能力に応じて分担領域を決めることにした。すなわち、A君には訳文の比較を、B君には高橋義孝の「『ファウスト』集注」の参照を、C君には『ゲーテ辞典』(GOETHE-WORTSCHATZ)による確認の作業を委託するという手筈にした。

かくして四年がかりでこのテキストをようやく読み終えることができた。難しいテキストもこのように分担を決めれば、授業も何とかできる筈であるということを教えて下さったのは、名学長として関西大学の歴史に名を残し、世間知らずで無謀だった小生が当時一方ならぬお世話になった、故大西昭男先生であった。

授業を充実させようと思うならば、教える側と教えられる側との間に相互信頼に裏づけられたコミュニケーションがなければならぬ。その具体例を挙げるならば、ケルン大学名誉教授ヴァルター・ドレーアー氏が廣池学園勤務当時に体感された、その「言葉では言い表せない独特のヒューマンな雰囲気」である。学園

の門をくぐり、芝生と木立と建造物とが織りなす静かなハーモニーを目にした瞬間、こういう「独特の雰囲気」がほのぼのと伝わってきたのが、今も記憶に新しい。「雰囲気」——その言語はドイツ語の *Stimmung*、その動詞は *stimmen*、例えばオーケストラのチューニングを想起連想すればよいだろうか？——が如何に人間存在全般の在り方を決定するか、この状況はハイデッガー、さらには、一九七二年に廣池学園に招聘されたボルノーが詳論するところである。このことが、同学園によって二〇〇九年に主催された「モラロジー」の国際学会にキュンメル夫妻と共に参加することによって再確認されたのは、定年後確認された望外の貴重な体験であった。